孤独な愛され女王蜂　４

孤独な愛され女王蜂　4

EntsCat

https://www.pixiv.net/novel/show.php?id=19452365

R-18, モ腐サイコ100, 霊幻総受け, ヨシ霊, ♡喘ぎ, オメガバース, もぶお兄さん×霊幻, モブ霊, 濁点喘ぎ

誰得？俺得！なオメガバースパロです。オリジナル設定含みます。ヨシ霊ですがビッチ師匠総受けです。モブお兄さん×師匠あります。今回は本番はモブ霊です。♡喘ぎ、濁点喘ぎあり。倫理がまたもやアレ。お好きな方はお付き合いください。

いつもいいねやブクマ、絵文字やコメントなどありがとうございます！とても励みになっています🌸
マシュマロもありがとうございます〜！https://marshmallow-qa.com/entscat?utm_medium=url_text and utm_source=promotion

孤独な愛され女王蜂　4

今日は誰とも約束のない日だ。だけども、今日の宿を探すために発展場になっているバーに来ている。
「あはは新隆マジおもしろーい♪」
言動はチャラいが、身なりはしっかりしていて、高そうな時計をしてるアルファがすぐに釣れた。
「あのさぁ、俺、今日泊まるところ探してるんだけど、カンさんはそういうの大丈夫な人？」
「えっ全然大丈夫！泊まってっていいよ〜」
よしよし、あとは職業をさりげなく聞き出すだけだな。
「ていうか新隆ちゃんって番に捨てられた系？」
さら、とうなじの髪を触られる。くっきりと残るモブの噛み跡が晒される。
「んー、まあそんな感じ」
「良かった！俺さぁ、他のアルファと寝てる子無理なんだよね」
おっと。
「生活も夜の方も満足させてあげるからさぁ、俺のハーレムに入りなよ、新隆」
あー、このタイプか。残念、俺、他に彼氏いるんだよなぁ。
「ごめ……」
「新隆！」
チャラアルファに謝って次に行こうと思ってたら、聞き覚えのある声がして、がっと手を掴まれた。
「あっくん！？」
医者の元彼アルファだ。
「離せよ、警察呼ぶぞ。俺とお前とはもう別れたはずだろ」
「男漁りならここに来るはずだと思って……っ！頼む新隆、考え直してくれっ……っ！もう結婚して欲しいなんて言わない、お前が他のアルファと何をしてても黙ってる、お金だって好きなだけ渡してやるから、帰ってきてくれ……っ！」
ため息をつく。

「……お前を傷付けるだけの関係は、絶対どこかで破綻するぜ」
俺のフェロモンの中毒になっているアルファに引導を渡してやる。
「あっくんは俺と結婚したかった。俺はあっくんと結婚したくなかった。俺たちの関係にはもう結論が出てるだろ」
「……っ」
あっくんの目が血走ってくる。
……！まずい、ラットだ……！
「来いっ、お前は俺のものだ！！」
「痛……っ！引っ張るなよ！！」
あっくんに無理やり離席させられ、椅子が倒れる。
そのまま俺を引っ張って行こうとするあっくんの手を、チャラいアルファがガッと掴む。ぎりぎりと握りしめて、俺の手が解放された。
「おいおい、フラれてんじゃんお前（笑）……こいつはもう俺のオメガだよ。手ェ離せや」
同じくラットに入ったチャラアルファは、つけていた時計を外してメリケンサック代わりに握り込む。
──ヤバい、こいつ、ケンカ慣れしてる……！！
「なんだと！！」
「あっくんダメだ、ケンカするな──！」
あっくんの襟ぐりを掴んだチャラアルファが拳を振りかぶる。
俺は２人の間に入って、腕で頭を庇った。
あんなものをラットに入った無防備状態で受けたら、怪我じゃ済まない──！
「「え！？」」
２人が困惑した声を上げる。
「馬鹿、危ない──！」
チャラアルファが慌てる。分かってるよクソが！！
「……っ！」
衝撃に備える。が、いつまで経っても痛みはやって来なかった。
「……傷害の現行犯逮捕だ」
真っ白な煙が固まって、あっくんとチャラアルファを捕まえている。

「大丈夫か」
ヨシフさんが助けてくれたらしい。この人も超能力者だったのか……。
「う、うん」
ラットになった２人の大量のアルファフェロモンを浴びてぽーっとする。俺はこくこくと頷いた。
「何してんだ、お前」
呆れたヨシフさんの声に、へらっと笑う。
今日はいい匂いすんなあ、ヨシフさん。
「泊まらせてくれるアルファ探してた。あと新しい彼氏も」
ヨシフさんがぽかーんとする。俺そんなに変なこと言った？
「俺が聞きたかったのはそんなことじゃ……いやいい。……まあ、頑張れ」
「おう、応援ありがとう」
でもこれだけアルファフェロモン染み付いてたら、他のアルファ寄ってこないかなあ……。
「一回シャワー浴びた方がいいなあ」
独り言が多い。ダメだ、アルファフェロモンに酔ってるわ、俺。
俺は会計をして家に帰る。
ヨシフさんの家に。
「……いやなんで俺んちなんだよ！！」
「おかえり〜」
「た、ただいま……じゃなくて！」
あはは、礼儀正しいから反射的に返事しちゃうんだ、かわいー。
「だってオメガ１人じゃ危ないじゃん？この家ならヨシフさんがいるから安全だし」
おれはぱさぱさと服を脱ぎ捨てて勝手に洗濯機に放り込む。
裸になっていく俺から、ヨシフさんは目を逸らしている。紳士だなあ。ありがたい。
シャワーを浴びると、突然今までの行動が恥ずかしくなってきた。なんでストリップしちゃってんの、俺。オッサンの裸見せつけられるヨシフさん可哀想すぎるだろ！あー、やっちまった。
「た、助けてくれてありがとな！あの、悪いけど、着替えてる間、

後ろ向いてて貰っていい？」
「ん、ああ」
ヨシフさんはキッチンの方に移動して、換気扇の下でタバコを吸っている。
俺はそそくさとボストンバッグから着替えを出して身に付けた。
「じゃ、邪魔したな！宿が決まれば、ボストンバッグは回収して鍵は返すから！」
「……おー」
換気扇の下でひらひらと手を振るヨシフさん。
しかし。
またしてもその手ががっしりと俺の腕を掴んでいた。
「あ」
「あ？」
お互いぽかんとする。
「ま、待て。すぐ引き剥がすから……くそっ、我ながら何て力だ」
ヨシフさんはタバコを灰皿に押し付けて、指を外そうと力を込める。
「いや無理に剥がそうとすると折れるぜ？ほら、また俺のフェロモン吸って」
俺はヨシフさんに抱きつく。
「あっ、馬鹿っ」
「ぎゃあっ！」
俺はかなり強く……ほぼサバオリの強さで、ヨシフさんに抱きしめられた。
「……俺もちょっとラット入りかけたんだよ。分かるだろ」
「あー……」
俺を内定中のヨシフさんは多分全部見てた。俺が他のアルファに連れ去られそうになるのも、また別のアルファに殴られそうになったのも。
運命の番にそれを見せたのは、正直、酷だ。そりゃラットにも入りかけるってものだろう。
「俺のフェロモン吸って？前みたいに」
「……今日は俺も抑制剤飲んでないからな、フェロモンの効きが悪

いかもしれん」
「そうなの？」
「抑制剤のんでもお前のフェロモンが貫通してくるなら、自身のアルファフェロモンで防御した方がまだマシかと思ってな」
なるほどなるほど。確かにそれはそうかもしれない。
「ただ、ラットになりかけたからな……誤算だった」
ラット。主にアルファが自分のオメガを守ろうとして凶暴化することだ。基本的には自分の番のオメガに対して起こすが、恋人など『自分のもの』だと認識してるオメガが原因で起こることもある。オメガフェロモンを恒常的に吸ってる、強いアルファほど起こしやすくなる。つまり抑制剤を飲んでない俺と付き合ってたやつとか、オメガを複数人囲ってるやつとかが起こしやすくなるって寸法だ。ヨシフさんのは多分……運命の番だからだろうな……可哀想に。
「どう？離せそう？」
「……いや、ダメだ」
「一回セックスする？それで収まると思うけど」
「ふざけんな」
「そう言うと思った。ね、ベッド行こ」
「はあ！？」
俺はクスクス笑いながら、タンゴでも踊るようにヨシフさんをベッドまで誘導する。
「今日はこのまま寝ちゃおう？多分朝には収まってるから」
一晩俺のフェロモンを吸い込めば、俺が原因のラットなら収まるはずだ。モブがそうだった。
「い、いいのか？」
「ん？何が？」
「もし、寝ぼけて襲っちまったりしたら……」
「いや別にそれはそれでいいぜ？それに」
どさ、と２人で抱き合ったままベッドに倒れ込む。
「ヨシフさんはそんなことしない。そういうタイプだ」
「……」
「好きな人しか抱きたくない。仕事上はどうだか知らないけど、そういう人だろ？」

「……」
沈黙は図星ととらせてもらうぜ？
「俺、ヨシフさんのそういうところ好きだなぁ」
俺が抱きついて頬擦りすると、びくりとヨシフさんが震えて更に強く抱きしめてくる。折れる折れる、折れるって。
「はぁ？」
「絶対に俺みたいなやつは好きにならなさそうな所、好きだぜ」
落ち着く。こう言う人は好きだ。セフレにしてくんねぇかなぁ。してくれないだろうな。

そういうところ、好きだぜ。

「おい霊幻、……の……いう……」
ヨシフさんが何か言っていたみたいだが、俺はもう眠くて仕方なくて、よく聞き取れなかった。

※

今日の相談所はちょっと余裕がある。本物っぽい出張案件があるだけで、芹沢に行って貰ったら、あとはお祓いグラフィックと、たまに入る相談＆呪術クラッシュ案件ぐらいだ。
……あと６人分の年末調整と。……こういう事務仕事が地味に辛い。が、事業主の責務だ。仕方ない。
「休憩がてら、ヨシフさんにお茶の淹れ方教えてあげる」
「ありがとうございます」
トメちゃんが新入り（？）のヨシフさんに気さくに話しかけてあげている。芹沢やエクボがヨシフさんに冷たいので、気を遣っているのだろう。……すまない、トメちゃん……そいつ多分警察のスパイなんだよ……。
「ウチのお茶の淹れ方は美味しいわよ〜？なんてったって所長の秘伝レシピだからね」
ぐわっ、昔ネットでちょっと調べただけの淹れ方をそんなふうに言われるとおもはゆい。

「ヨシフさん、お茶を淹れるコツって分かる？」
「……温度とかですか？」
ちっちっち、とおそらく得意げにヨシフさんに言っているトメちゃんが目に浮かぶ。
「誰が飲むかをちゃんと考えることよ。例えば所長なら濃いめでぬるめ、芹沢さんなら薄めとかね。どれだけ温度が正しくても、相手の好みに合ってなくちゃ意味がないの。お客さんの好みの把握は客商売の基本！練習でまずは同僚の好みの把握からやってみるといいわ！」
「……なるほど」
あああもうやめてくれトメちゃん……。
「……なあんてね。全部霊幻さんの受け売りなんだけどね」
「そうなんですか！？」
いや驚いてみせなくていいから、ヨシフさん。
「霊幻さーん、チョコパイ食べていい？」
「ダメ」
「ちっ、このくらいのヨイショじゃダメだったか。仕方ない、この賞味期限ギリギリの煎餅でも食べましょ」
それも客用なんだが……まあいいか、賞味期限切らすよりも……。
「こんばんは」
モブが入ってきた。学校が終わったのだろう。
……ん？なんか雰囲気おかしいな？なんか……ラット入ってないか……？
「影山さんは何か霊幻さんに習ったことってあるんですか？」
うわ、ヨシフさん、今はちょっとモブに話しかけない方が……。
「ちょっと分からないな……山ほど色んなことを教えて貰ったので。そういうことも含めて」
引き攣りかけたヨシフさんが咄嗟に営業スマイルを浮かべる。さすがこの辺はプロだな。
「僕の運命は師匠ですし、師匠の運命は僕です。師匠の番は僕なんですから、ヨシフさんは諦めてくださいね」
……濃いアルファフェロモンがここまで漂ってくる。モブは最強クラスのアルファだ。それにあてられたトメちゃんは嫌そうな顔をし

た。
「……なんで俺に、そんなことを」
「芹沢さんから聞きました。師匠の運命の番だそうですね？」
芹沢が申し訳なさそうにそろっと事務所に入ってくる。
「この事務所に入り込んだのも師匠が目当てですか？この間勝手に師匠の机開けてましたよね？間違えたのかなと思ってたけど、他意があるなら師匠の番として無視でき」
どん、とトメちゃんが怒った顔でお盆をローテーブルに置く。
「番について隠してるオメガ性の前で、番について話すのはセクハラよ。ここは霊幻さんの事務所。霊幻さんが嫌がる話をするのなら、２人とも外に出てちょうだい。──それとも、２人とも私につまみ出されたいのかしら？」
中学生時代の先輩であるトメちゃんにはモブも弱い。黙り込んだし、そもそも黙っていたヨシフさんはだんまりを続けている。
「……付き合ってすらいないのに番づら、ですか」
だがヨシフさんがまさかのとんでもない爆弾を落としてくれた。
「……は？」
「あーっとモブ！今日はお前の番だったな！今日は朝まで大丈夫だからな〜！！」
俺は完全にラットに入ったモブの前に身体を滑り込ませる。
ヒート誘発剤を半錠だけお茶で流し込んで、念の為オメガフェロモンの量を増やしておく。
「さ、今日はラーメン食べてから行こう！デートだ、嬉しいだろ〜？」
「……は、い」
モブの視界を俺で埋める。
んっ♡ちょっ、と、ヒート、っぽいかなっ♡
「霊幻」
ヨシフさんが何を考えてるのか、俺の腕を掴んだ。
モブが無言で指を上げる。
俺は片腕をヨシフさんの腕の上に乗せてかばった。
「モブ、だめだ。ヨシフさん、『離せ』」
フェロモンに乗せて声を投げつける。

「……っ、」
ヨシフさんはびりびりと快感を感じながら、思わず手を離した。
その隙にさっとモブと事務所を後にした。施錠は芹沢にお願いしよう。
「いつものラーメン屋でいいか？」
「……はい」
後悔しか顔に浮かべていない弟子に、俺はやれやれとため息をつく。
「……モブ、俺との番、解除するか？」
ここまで弟子を苦しめているなら、俺も覚悟を決めるべきなのかもしれない。

なあに。死ぬわけじゃない。便利なヒートが起こらなくなるだけだ。

「いやです、師匠は僕を捨てるんですか」
「何言ってんだよ、お前が俺を捨てるんだよ。……俺は構わないから、番を解消してくれていいんだぜ」
「そんなこと、するわけがない──ようやく手に入れたのに」
モブが人目はばからず口付けてくる。
「おいっ、モブっ、ここ外だぞっ」
「構わないです。僕は師匠のものだって世間に知らしめてやる」
「えええ……せめて逆だろ……」
「……まだバース性が出てなかった小学生の時、僕を１人の人間として守り導いてくれたのは師匠だった」
ぎゅう、とすっかり背の高くなったモブが抱きしめてくる。
「……思えばあの時から、僕は師匠に惹かれてたのかもしれない」
「いやそれ刷り込みってやつだろ」
俺は呆れて反論するが、モブは意に介さない。
「僕をアルファじゃなくて１人の人として扱ってくれるのは師匠だけだ。……僕が好きなのは、師匠だけだ……」
俺はよしよしとモブの背中を撫でる。
「それはお前が他のオメガと付き合ったことがないからそう思うだ

けだ」
「親しくしたことならあります。でも全然惹かれなかった」
「……運命と出会えばきっとお前は幸せになれるさ」
グルル、とモブの喉が凶暴に鳴って俺は慌てた。何で今ので怒るんだよ！
「たとえ運命の番だろうと、師匠は渡さない──！」
「いや俺じゃなくてお前の運命の話をしてたんだけど」
「僕の運命の番なんてどうでもいいです。……何度も命をかけて僕を助けに来てくれた、いまだにずっと僕を守ろうとしてくれる、あなたが僕の運命じゃないなら、運命なんてものは存在しない」
うーーーーーーーん困ったやつだな、本当に。
「真っ当な大人なら誰でも同じことをしたさ。俺だからじゃない」
「ふざけたことを。あなた以外の誰が暴走した僕に駆け寄って言葉をかけてくれるってんですか」
うっ、とモブが顔をしかめる。
俺が軽くヒートに入ったらしい。
「師匠……フェロモンで黙らせるのはずるいですよ……」
「仕方ないだろ、お前ラットに入ってるっぽいんだから」
「ラット、入ってないです……ただ、嫉妬しただけ……」
はあ、と俺はため息をついて力の抜けてきたモブの腕を外す。
「お前は付き合いの長い師匠が誰かに取られると思っちゃったんだな？」
「！そう、そうです！！師匠、やっとわかって……！」
「大丈夫だ、例え誰かと結婚したとしても、お前は俺の可愛い弟子だよ、モブ」
俺はモブのさらさらした綺麗な黒髪を撫でて微笑む。
「……やっぱり分かってない……ししょお、大学卒業して就職したら、僕と結婚してくれないんですか？だって僕ら番でしょう？」
「あっはは、その頃には俺いくつだと思ってんだよ！その時にお前がまだそんなこと言ってたら考えてやるよ」
「！！言質とりましたからね」
「馬鹿だな、働き出したらオメガなんかお前クラスのアルファならよりどりみどりなんだから、俺のことなんて一瞬で忘れるよ」

「今でもよりどりみどりですよ。でも師匠のことを一瞬でも忘れたことなんてありません」
うーん、重症だな……。
「ラーメン、食べに行きましょうよ」
「……そうだな」
いつまでも道端で言い争ってても仕方ない。ラーメン食べて、セックスして、有耶無耶にしてしまおう……。
「チャーシューメン２つ」
良く除霊帰りに寄っていたラーメン屋に２人で入る。
「ほら、チャーシュー１枚やるよ」
「わ、ありがとうございます」
なあ。
これでいいじゃねぇかよ。
たまに会ってさ、一緒にラーメン食って、そんで元気でなってさよならする。
それが俺たちの自然な関係だったはずだ。
何でお前、俺を噛んだりしたんだよ……。
丁寧にラーメンを食べるモブの横顔をそっと盗み見る。
かっ……こよく、なったよなあ、コイツ。
アルファは成長するにつれその美しさを増す。オメガもそうだが、まぁ俺ぐらいの年齢になってくると、悲しいかな老いの方が目立ってくる。
それもあってあまり裸をみられたくないのだけれども。
今が盛りのモブは、ミステリアスな男前になっていた。
これはさぞかしモテるだろうなぁ。たぶん俺の他にもオメガが居るはずだ。
隠さなくたっていいのにな。俺だって他のアルファがいるって言ってるんだからさ。
「師匠はスープ飲まない方がいいですよ、塩分気をつけた方が」
レンゲがピタッと止まる。モブはスープを飲み終わったところだった。
「……じゃあやめておこうかな」
まだ健康診断で引っかかったことは無い。だが、引っかかる原因を

作りたくはない。
ご馳走様をして、ホテルに向かう。
「師匠、たまには完全に意識を飛ばしてあげますね。気持ちいいですよ」
「は？」
そう言って。
モブは　いき　を　お　れ　に　ふ　き
か　け　て
「ゔあ゛あ゛あ゛あ゛あ゛っ！？♡♡♡」
「本格的なヒート久しぶりじゃないですか？」
うあっ♡やだぁっ♡んあっ♡あんっ♡
「さあ、一緒にお風呂入りましょうね。隅々まで洗ってあげます」
やらぁっ♡はなしてぇっ♡っあん♡あ♡あぁっ♡
「本当に師匠は綺麗だなぁ……あ、一回イっときます？」
あぁあぁああっ♡やらぁあぁあああああっ♡
「可愛い……もっと声聞かせてください」
やらぁ……っ♡やなのぉ……っ♡
「気をつけてベッドに寝てくださいね。だめだ、へたり込んじゃって……しょうがないな、超能力でちょっと浮かせますよ」
んっ♡さわ、さわるなぁ……っ♡
「大丈夫ですよ、可愛い、可愛い……っ」
あ♡
ああああああああっ♡
「師匠、トコロテンしちゃいました？今何されても気持ちいいですもんね、仕方ないですけど……気絶されるとつまらないので、根本縛りますね」
！！
やらあああああぁあっ♡♡♡♡
「メスイキなら何度でもできますもんね。ほら、そろそろ来るんじゃないですか？」
あ……♡あ……♡
あぁああぁあっっっ♡
「はは、びくびくして、きゅうきゅう僕のを締め付けて、気持ちい

いんですね。嬉しいなぁ」
もうやらぁっ♡きもちいのやらぁっ♡♡♡
「こらこら、にげない、でっ！」
ん゛お゛っっっっ♡
「またメスイキしました？すっかりイきぐせついちゃってますね……ヒート中だから仕方ないか」
あ……あ……あ、イく、またイ゛ぐうっ！♡♡♡♡
「ああ、そんなに締め付けないで……ほら、僕も出ちゃった」
んんんんんんッ♡♡♡♡
「あれ？ずるるって抜くの気持ちよかったですか？また足がきゅうってなってる」
はーっ♡はぁっ♡はーっ♡
「今日は大きくピストンしてあげますね」
あぁアァアアッ♡♡♡♡♡♡♡♡

「運命なんてものは、握りつぶしてあげますね、師匠……♡」

続